慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Thérèse Desqueyrouxの草稿Iについて
Sub Title	Sur le manuscrit I de Thérèse Desqueyroux
Author	高山, 鉄男(Takayama, Tetsuo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1991
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.59, (1991. 3) ,p.240(201)- 253(188)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大濱甫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00590001-0253

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Thérèse Desqueyroux の草稿Ⅰについて

高山鉄男

Mauriac: *Thérèse Desqueyroux* の成立をめぐる，私の考え方の大要は，すでに，『テレーズ・デスケルーの成立に関する一考察』[1]に述べたところである。いまその概略を，ふたたびここに記せば，それは，(1)*Thérèse Desqueyroux* は，執筆当初の段階においては，義妹アンヌにたいする，女主人公テレーズの同性愛的情念の物語であった (2)しかし，1926年4月以降，この作品は，家庭批判の主題を前面に押し出すものとなり，結局，決定稿において，個人の社会にたいする反抗とでもいうべきものを描くにいたった (3)モーリヤックが，同性愛的情念の物語を計画したのは，ほかならぬ作者じしんが，この種の感情を体験し，*Thérèse Desqueyroux* 執筆の前後において，深刻な精神的，宗教的危機に見舞われていたからである，というにつきる。前記論文では，私は，本作品の成立と意義に関し，ごく大雑把に大要を記すにとどまり，成立の各段階を精密に検証することはできなかった。そこで，本稿では，*Thérèse Desqueyroux* 成立の全過程においてもっとも重要な段階をなす，草稿Ⅰに関し，やや詳細な検討を試みたいと思う。

前記論文においてすでに述べたように，*Thérèse Desqueyroux* の成立を研究するにあたり，重要な資料は，(1)初稿，*Conscience, instinct divin* (2) *Thérèse Desqueyroux* の草稿Ⅰ (3)同草稿Ⅱ (4)決定稿 の4種類である。このうち(1)は，1927年，*Thérèse Desqueyroux* 刊行の数週間後に，作者みずからによって刊行されており，(4)とともに入手，被見が容易である。しかし(2)および(3)に関しては，今日まで刊行されておらず，草稿そのもの

は，テキサス大学のヘアリー・ランサム人文研究所に保存されている。先年物故した，すぐれたモーリヤック研究家，ジャック・プチは，プレイヤード版全集[2]を編纂するにあたり，草稿Ⅰ及び草稿Ⅱの写真版を入手，ヴァリアントを作成した。このヴァリアントは，附された解説，ノートとともにきわめて有益で，私じしんも裨益されるところ大であった。しかし，ヴァリアントはあくまでもヴァリアントであって，草稿そのものでないことは言うまでもなく，成立の過程を研究するのに資料として不充分である。幸いにして，私は，ヘアリー・ランサム人文研究所の好意により，草稿Ⅰ及び草稿Ⅱを写真版で入手することができたので，本稿では，作品成立上の観点から，草稿Ⅰに関し，若干の私見を述べてみたい[3]。ただし，本研究は，目下進行中であって，これは，いわば中間報告にすぎず，最終的な結論については，後日を期するものであると，あらかじめお断りしておきたい。

まず，草稿Ⅰの執筆の時期であるが，これは早くても，1925年11月以降と思われる。というのは，1925年11月28日付，兄ピエールあて書簡で，モーリヤックは，カナビー事件に関する資料の送付を謝し，さらに翌1926年1月31日付書簡で，ふたたびこの資料について言及するとともに，正常と異常の問題について述べ，「私はすっかりこの問題にとりつかれているので，1冊の本が生れるでしょう」[4]と述べているからである。カナビー事件とは，1905年にボルドーで実際にあった犯罪で，カナビー夫人が夫を毒殺しようとした事件である。*Thérèse Desqueyroux* の筋書きのもとになった事実として知られている。だからモーリヤックが，*Thérèse Desqueyroux* の主題にとり組みはじめたのは，1925年11月以降ということになり，したがって，草稿Ⅰ執筆の年代上の上限は1925年11月である。では下限はいつか。それは1926年4月13日である。なぜならば，草稿Ⅰの第1ページ，いわゆる page de titre に記されたきわめて重要な覚え書（以下「覚え書」と略す）には，1926年4月13日の日付が明示され，後述のように，この「覚え書」は，草稿Ⅰの執筆完了の時点で書かれたものと推定されるか

らである。もっともこのような大雑把な推論では，初稿，*Conscience, instinct divin*と草稿Ⅰのそれぞれの執筆時期を特定することはではない。いずれも1925年11月と翌1926年4月13日のあいだに書かれた，としか言えないわけである。しかしながら，草稿Ⅰは，おそらく1926年3月から4月にかけて書かれたのではないかと思われる。というのは1926年3月19日付のルイ・ブランあて書簡に，〈Je puis vous dire, dés à present, que je compte travailler à *Locuste* encore tout cet été. Ce sera pour la rentrée, sans doute, ou pour le début de 1927.〉[5]とあるが，草稿Ⅰの執筆のある段階で，*Thérèse Desqueyroux* には *Sainte Locuste* という題名が考えられていたからである。

草稿Ⅰの執筆時に，*Sainte Locuste* なる題名を作者が考えていたとする根拠は，さきにも言及した草稿Ⅰの page de titre にある。この page de titre には，上部に大きな字で，*Thérèse Desqueyroux* と書かれ，その下にやや小さく *Sainte Locuste* という題名が記されている。さらにその下には L'esprit de famille とあって，作者自筆の「覚え書」が7行記されている。この「覚え書」はプレイヤード版全集に採録されているが[6]，非常に重要なものなので全文を引用する。

L'esprit de famille

Aujourd'hui 13 avril 1926, je prends conscience de ce que doit être ce livre en même temps que j'en découvre le titre. L'anecdote de "la femme qui empoisonne son mari" ne sert qu'à illustrer ce sacrifice perpetuel dans une famille franç〈aise〉[7] à l'honneur du nom, à la Famille: que ça ne se[8] sache pas. Le titre secret est :*le plat de cendre* (les chats recouvrent leurs ordures). C'est la grand-mère de Thérèse qui a fui avec un amant. Et sa mère s'est entendu dire toute sa vie par son mari: "Expiez." Redoublement de rigorisme. Placer chez les Belloc un frère aîné sur la fin duquel on ne sait rien. Le fils aîné refuse d'épouser (Thérèse 抹消) Anne à

cause des rumeurs de crime; mais on réserve pour le cadet la fille de Thérèse qui héritera d'Anne. Rôle du curé qui fait[9] "faire la théorie de la chose" sans en avoir l'air (ex⟨em⟩ple de la famille religieuse).

この「覚え書」はジャック・プチも述べている通り[10]，草稿Ⅰの執筆を放棄した段階で記されたものと思われる。というよりも，「覚え書」にある通り，「フランス中産階級における，家名の名誉，家庭のためのたえざる自己犠牲」という主題を作者が発見したとき，草稿Ⅰは放棄されたのであった。草稿Ⅰが放棄されたから，「覚え書」が書かれたのではなく，「覚え書」に記されたような，新たな主題の発見が，草稿Ⅰの執筆を中断せしめた。なぜなら草稿Ⅰではもっぱら個人の情念の問題を中心として，物語が展開していたからである。社会的な主題を発見したとき，作者は稿を新たにして，草稿Ⅱを書きはじめなければならなかったのである。

ところで，この「覚え書」のなかで，モーリヤックは，「この書の題名を発見すると同時に，この書がいかなるものであらねばならないかを，私は自覚した」と，述べているが，ここにいう題名は，なにを指すのであろうか。このページには，*Thérèse Desqueyroux*，*Sainte Locuste*, *L'esprit de famille* の三つの題名が記されている。プチは，「覚え書」にいう「題名」とは，*L'esprit de famille* を指すとした[11]。プチの推定は可能性としてはあり得るものだが，ただし，執筆開始に先立って，まず *Thérèse Desqueyroux* という題名が考えられて，作者はそれを page de titre に記し，ついで草稿Ⅰ執筆の中断後に，*L'esprit de famille* と改題したというふうに考えてはならない。なぜならば，草稿Ⅰでは，Desqueyroux という名が一貫して，テレーズの実家の姓にあてられ，夫ベルナールの姓としては Larroque が用いられているからである。つまり決定稿とはことなり，ラロック家の娘，テレーズがデスケル一家に嫁したのではなく，その逆なのである。夫を殺害しようとした女の物語に，題名として，女主人公の娘時代の名を冠することはあり得ないから，page de titre に *Thérèse*

Desqueyroux という題名が記されたのは，草稿Ⅰの執筆開始時でも，執筆中でもなく，あくまで執筆の中断後でなければならない。

おそらく作者は，草稿Ⅰの執筆を中断したあと，物語のその後の展開について思いをめぐらせるとともに，未定であった題名についてもいろいろと考え，*Thérèse Desqueyroux*，*Sainte Locuste*，*L'esprit de famille* の3つの題名をあいついで page de titre に記したのであろう。

では，なぜ作者は，草稿Ⅰの執筆を中断するにいたったか。結論から先に言えば，草稿Ⅰの執筆を中断せしめたのはアンヌの死である。だが，決定稿にはあらわれていないこのアンヌの死について論ずる前に，草稿Ⅰをあたかも1つの独立した作品であるかのように検討し，その主題について考えなければならない。

草稿Ⅰは，決定稿におけると同様，テレーズが裁判所から出て来るところから始まる。ついで，アルジュルーズに戻るため汽車に乗ったテレーズは，夫にすべてを打ちあけて許しを得たいと思う。そして夫への告白の準備として，回想にふける。冒頭部分の大まかな内容，回想形式による物語の進行などは，細部を除いて決定稿と同じである。さらに娘時代の思い出，アンヌと過ごしたアルジュルーズの夏，ベルナールとの結婚，アンヌとアゼベドの恋，アンヌの監禁，テレーズとアゼベドの出会いなど，筋書きそのものでは，草稿Ⅰと決定稿とのあいだに大きな相違はない。ただ，物語の表面的な類似にもかかわらず，物語の全体をつらぬく根本的なモチーフには大きな相違がある。これはすでに，「『テレーズ・デスケルー』の成立に関する一考察」で，述べたことだが，草稿Ⅰをあるがままに見るならば，これはテレーズとアンヌの物語であり，テレーズのアンヌにたいする一方的な愛着の物語である。他方では，アンヌとアゼベドの物語でもあって，アゼベドとの仲を裂かれたアンヌが，自宅に監禁され，苦しみやつれて行く物語である。アンヌは決定稿におけるよりも，はるかに重要な役割を演じ，アゼベドも重要な位置を占めている。アンヌとアゼベドを背景にしりぞかせ，わずかに副次的な役割りのみを与える決断をしたとき，

作者は草稿Ⅰを中断せざるを得なかった。なぜなら，草稿Ⅰでは，テレーズのアンヌにたいする愛着と，アンヌのアゼベドにたいする愛着が，いずれも実現されることのない不幸な情念として描かれ，それが物語の劇的な展開を支えているからである。アンヌとアゼベドを背景にしりぞかせるということは，テレーズと夫ベルナールの物語にもっぱら光をあて，この作品を，家庭にたいする個人の反抗の物語に，変質せしめることにほかならなかった。

さきにも言及したアンヌの死についてであるが，草稿Ⅰ執筆の段階で，アンヌの死が作者によって想定されていたことは確実と思われる。アンヌを死にいたらしめたのは，テレーズであり，テレーズは，アゼベドの気持をあからさまにアンヌに伝えることによって，アンヌの絶望と死を招来したのである。すでに，初稿，*Conscience, instinct divin* において，女主人公は，次のように語っている。

> …C'est que je ne suis pas sûre d'avoir voulu commettre cet assassinat, et pas même sûre de l'avoir commis. (...) Par contre il est une mort où certes je ne suis pour rien; saurai-je jamais pourquoi j'en porte le poids qui m'étouffe?[12)]

これは，夫の殺害以外に，女主人公には負うべき重大な罪があることを，間接的に暗示するものである。草稿Ⅰにはさらに明確な暗示がある。

> Qu' ai-je fait de si mal?...Je n'ai rien dit à Anne durant ces quelques jours que la vérité...[13)]

また，アゼベドとの仲を裂くために，アンヌを監禁した際のアンヌの母親の気持ちについて書かれた，〈Elle eût préferé la voir morte que la femme d'un Azévédo.〉[14)]という言葉も，アンヌの死を予告するものであろう。さらに，テレーズからアゼベドの気持を知らされて，うちひしがれ

たアンヌに関する，抹消された一句，〈...ils ne s'apercevaient pas qu'elle était déjà morte〉[15]も，アンヌの死の近いことを暗示するものにほかならない。

他方，さきに全文を引用した「覚え書」には，〈Placer chez les Belloc un frére aîné sur la fin duquel on ne sait rien. Le fils aîné refuse d'épouser 〔Thérèse 抹消〕 Anne à cause des rumeurs de crime; mais on réserve pour le cadet la fille de Thérèse qui héritera d'Anne.〉と，あるが，引用文中の Belloc とは，決定稿の Deguilhem のことである。草稿Ⅰには，はじめ Belloc と書かれ，つぎに Deguilhem と訂正された箇所があるからである[16]。すなわち，アンヌの両親がアンヌを嫁がせようとしている一家で，「覚え書」によれば，どうやらテレーズの毒殺未遂の噂のせいで，ベロック家はアンヌとの結婚は断る。しかし，やがてアンヌは死に，後日，成年に達してアンヌの財産を相続するはずのテレーズの娘と，ベロック家の次男との結婚が合意される，という筋書きを作者は考えていたようである。「覚え書」のこの一節は，草稿Ⅰの執筆が放棄され，草稿Ⅱの想が練られていた時点で，アンヌの死が，なお予定されていたことを証拠だてるものであろう。

事実，草稿Ⅰでは，アゼベドにたいするアンヌの情熱は，まさしく出口のない絶望的なものとして描かれていて，アンヌには死にいたる以外の他の道はない，という印象が与えられる。ほとんど少女といってもいい無垢な娘，アンヌの恋と死は，草稿Ⅰの段階では，物語の重要な主題であったが，草稿Ⅱ以降では，ただその痕跡を残しているにすぎない。

このように考えるとき，アンヌとアゼベドの仲を裂こうとするテレーズの行為は，草稿Ⅰにおいては，決定稿におけるよりもはるかに重大な意味をもち，それは夫にたいする殺害未遂とともに，テレーズの二重の罪を構成するものであった。さらに，アンヌの恋人，アゼベドの写真をピンで刺すという呪術的な行為が，やはりアゼベドにたいする殺意を象徴的にあらわすとすれば，テレーズは，二重にも三重にも罪にとらわれた女であり，死にとりつかれた人間だった，ということができよう。

さきにも述べたように，アンヌが絶望して死んだのは，アゼベドの気持の真相をテレーズから知らされたからであるが，ではアゼベドの心理とはどのようなものであったか。決定稿では，かなり曖昧にしか表現されていないが[17]，草稿Ⅰにおいて，アゼベドの心理は明白である。草稿Ⅰで，アゼベドの心理を描写した部分の欄外書き込みには，〈très important: Azévédo considère Anne comme une Béatrice, lui impose ce rôle.〉[18]とある。要するに，アンヌにたいするアゼベドの感情は，精神的なものの範囲をまったく出ないものであって，アンヌとの結婚を望んだり，肉体的な結びつきを求めたりするものではまったくなかった。アンヌはテレーズあての手紙のなかで，アゼベドがどんなに遠慮深いか，性的な欲望をあらわにすることがいかにすくないかを強調し，この部分は決定稿にも残っているのだが，これは，元来は，アゼベドの心理をのちに明らにするための伏線だったのである。

では，アゼベドの心理は，ただあまりにも純粋であり，あまりにも精神的であるというにすぎないのであろうか。そうではないことが，つぎに引用する一節から推測される。これは草稿Ⅰにのみあって，決定稿にはまったくない文章である。

> (...) elle ne se doutait pas que ceux qui prêtent à l'amour humain des traits si noirs, c'est qu'ils portent dans la chair sans doute un germe morbide, un trouble instinct (qui la terrifie 抹消) (mortel 抹消) dont elle a peur; ces grands désirs de pureté ne sont qu'une fuite éperdue, qu'un retrait devant telle loi de son être qui la terrifie;[19]

引用した一節にある通り，アゼベドの純粋さとは，じつは「不純な本能」un trouble instinct のあらわれにほかならず，それは彼の人格を支配している「掟」telle loi の証左であったのだ。さらに露骨に言えば，アゼベドはテレーズとまったく同様に，同性愛者であって，アンヌとの結婚が不可

能な理由はそこにこそある。

アゼベドのこのような傾向を，テレーズがどの程度正確に察知したのか，作者は明確には描いていない。しかし，ともかく，テレーズは，アゼベドが通常の意味あいにおいて，アンヌを愛していないことを，冷酷に証明してみせ，アンヌを絶望へと追いつめて行く。

> Et pourtant elle se rappelle la semaine douce et claire de novembre comme d'un temps où elle eût tenu puissamment[20] entre ses paumes une tourterelle chaude, serrant de plus en plus fort l'oiseau, mais d'une pression si lente qu'il eût pu croire être caressé.[21]

この箇所も，草稿Ⅱ以降で消えた部分であるが，作品のもっとはじめのほうで，テレーズとアンヌが夏の休暇をともに過ごした折り，アンヌがひばり（雲雀）を射ちおとす場面がある。

> (...) et la chasseresse ramassait l'oiseau blessé, le serrait d'une main précautionneuse et, tout en caressant de ses lèvres les plumes chaudes, l'étouffait.〉[22]

この部分は草稿Ⅰにすでにあって，かつ決定稿にも残った箇所であるが，草稿Ⅰでは，テレーズが，きじばと tourterelle をしめ殺すように，アンヌを絶望と死に追いやったという，さきに引用した一節を予告し，かつその伏線をなすものである。しかし決定稿ではひばりのほうの描写のみ残り，きじばとの比喩が消えてしまったため，アルジュルーズの休暇のたんなる牧歌的一情景にすぎず，むしろ奇異な感じさえ与えている。

ところで，草稿Ⅰの執筆が放棄されたのは，アンヌの監禁が描かれ，テレーズによって，アゼベドの真の感情が伝えられたあと，アンヌの死が語られる直前であったわけだが，このことには大変に重要な意味があるよう

に思われる。なぜなら，「覚え書」にいう「家名のため，家族のため」(à l'honneur du nom, à la Famille) に最初に犠牲になったのは，テレーズではなくてアンヌだったからである。というよりも，アンヌの監禁を描き，その死の物語の構想を練っていた段階で，はじめて〈Sacrifice perpétuel dans une famille bourgeoise franç(aise) à l'honneur du nom, à la Famille〉という主題が明確に意識され，作者はこの主題をアンヌよりもむしろテレーゼに適用することで，現行 *Thérèse Desqueyroux* の主題に近づくことができたのである。

草稿Ⅰには，テレーズの監禁の主題はまだあらわれていないが，他方，アンヌの監禁は，決定稿におけるよりは，やや詳しく描かれている。草稿Ⅱ以降に出現する，テレーズの監禁の物語は，アンヌの監禁によって喚起され，触発されたものであろう。これら二人の女が，ともに家族のものたちによって幽閉されるという主題は，あい呼応しつつ，家庭の重圧をあらわし，cette cage aux barreaux innombrables et vivants[23]を，牢獄としての家庭を象徴するものである。こうして，二人の女が，ともに家庭の重圧に押しひしがれるにいたったのは，いずれも家庭の秩序を破壊するような行動に出たからである。アンヌの場合は，ドギレム家との結婚を拒んだからであり，テレーズの場合は，夫ベルナールを殺害しようとしたからである。そして，二人の女の行動の背景には，いずれの場合にも情念がある。それはアンヌの場合には，アゼベドにたいする恋であり，テレーズにおいてはアンヌにたいする同性愛的な感情である。ここでは，個人の情念対家庭，という図式が明らかに成立している。

だが，家庭のために犠牲となったのは，じつはアンヌとテレーズだけではない。アンヌの監禁と死に先立って，もう一人の女が家庭から抹殺されている。それはほかでもない，テレーズの母親である。決定稿では，テレーズの母親は，たんに，テレーズの幼い頃に死んだとされているが，草稿Ⅰでは「失踪した」と記されている。

Le commencement, c'etait son enfance, au lycée où elle fut dès

sa sixième année lorsque sa mère disparut.[24]

すなわち，テレーズは，母親が姿を消した時に，あるいは姿を消したがゆえに，リセに入学したのである。

また，草稿Ⅰでベルナールの母親は，テレーズの母親に関して次のようにのべている。

> Oui, la mère...Je sais bien...Mais c'est oublié, n'est-ce pas? On ne peut pas dire qu'il y ait eu de scandale (tellement tout a été étouffé 行間の書き込み) personne n'a jamais su ce qu'elle etait devenue (On dit qu'elle est morte quelque part dans la misère 行間の書き込み)[25]

ここですでに，〈tout a été étouffé〉という表現が用いられていることに注目したい。「覚え書」にいう，「家名のためにすべてを覆い，すべてを隠す」tout couvrir, tout cacher という主題は，テレーズじしんに適用されるに先立って，テレーズの母親に適用されているのだ。

さらにまた，草稿Ⅰ欄外の書き込みには，〈A développer: sa mère—scandales enterrés〉[26]とあり，テレーズの母親の失踪事件を，さらにくわしく記述する意図が作者にあったことがわかる。名前すらも記されていないテレーズの母親こそ，テレーズにもアンヌにも先立って，家庭の犠牲となり，女性の不幸な運命を体現する人だったのである。比喩的に言えば，テレーズの母親の失踪がアンヌの監禁と死を呼びよせ，アンヌの死がテレーズの監禁と放逐を招きよせた。そうして結局この小説を，家庭の秩序に反抗した不幸な女たちの物語としたのである。「覚え書」によって明らかな通り，当初，作者は作品のこのような主題を意識していなかった。しかし，アンヌがアゼベドの気持を知らされて絶望する場面を書いた時点で，すなわち，アンヌの死の物語をまさに書きはじめようとした段階で，ようやく作者は，このような主題の重要性に気づき，*Thérèse Desquey-*

roux, Sainte Locuste, L'esprit de famille という三つの題名を書き記し，同時に，「覚え書」に作品の新たな主題を記した。草稿Ⅰの執筆が放棄され，想を新たにして草稿Ⅱが書き始められた事情は，おおよそ，以上のようなものであったと思われる。また，さきに，アンヌの死こそ，草稿Ⅰの執筆を中断せしめたものである，と述べたのはこのような意味においてである。

では，草稿Ⅰの中断にいたるまで，作者は作品の主題をどのようなものとして考えていたのか。草稿Ⅰは，なによりも，テレーズのアンヌにたいする同性愛的な情念の物語である。このことは，すでに「『テレーズ・デスケルー』の成立に関する一考察」で述べた。だが，それとともに，草稿Ⅰは，アンヌのアゼベドにたいするむくわれぬ恋の物語でもあって，ここには情念の不可能性に関するラシーヌ的なドラマが描かれていると言ってよい。テレーズはアンヌに欲望をいだいているが，アンヌはテレーズに性的な関心をもたない。アンヌはアゼベドを恋しているが，アゼベドはアンヌにたいして性的な情熱をもつことがない。草稿Ⅰはまさしくラシーヌ的な情念の悲劇なのであって，アンヌの死と，テレーズによる毒殺未遂は，このような不幸な情念の必然的な結果であった。

モーリヤックがラシーヌから大きな影響を受けたことは，いまさら言うまでもないが，*Thérèse Desqueyroux* 刊行の翌年，1928年には，*La Vie de Jean Racine* が発表されていることに注意しなければならない。*Thérèse Desqueyroux* の執筆当時，作者がラシーヌの主人公たち，とりわけフェードルに思いをはせていたことは確かであろう。そして，ちょうど *Phèdre* において，ギリシャ的な運命観，すなわち個人の自由や責任を越えた外在的な宿命こそ，主人公の暗い情念の原因である，とする考え方と，罪に関するキリスト教的な意識とが複雑に交錯しているように，*Conscience, instinct divin* や草稿Ⅰにおいても，テレーズの罪に関して，すなわち，テレーズの自由と責任に関して，あい矛盾する思想が共存しているように思われる。*Conscience, instinct divin* の主人公は，〈Je ne connais pas mes péchés.〉[27]と言っている。みずからの罪を知り得ないも

のに，その責任をどうして追及し得よう。しかしこの問題を論ずるためには，初稿，*Conscience, instinct divin* から，1935年刊の *La Fin de la nuit* へといたる，テレーズ像変容の全過程を視野に入れなければならない。これはもちろん本稿の主題をこえるので，ここでひとまず筆をおくことにしたい。

注

1） 慶應義塾大学日吉紀要「フランス語フランス文学」第4号（1987）pp.70～85.
2） *Œuvres romanesques et théâtrales*, t.1～t.4, Gallimard, 1978 1985.
3） モーリヤックの草稿の大部分は，ジャック＝ドゥーセ文芸図書館に保存されている。*Thérèse Desqueyroux* の草稿のみ，なぜアメリカ合衆国に渡ったのか，その経緯についてはつまびらかにしない。草稿Ⅱには，1927年4月4日付のエドワール・シャンピオンあてモーリヤックの書簡が附されており，*Thérèse Desqueyroux* 刊行の直後，草稿が作者の手からまずエドワール・シャンピオンの手に渡ったことがわかる。
4） Lacouture: *François Mauriac*, Seuil, 1980, p.208. この書簡は，モーリヤックの既刊の書簡集には収められていない。ラクチュールは，モーリヤック家保存の未完資料によったものと思われる。
5） Mauriac: *Nouvells lettres d'une vie*, Grasset, 1989, p.106.
6） *Œuvres romanesques et théâtrales*, *op. cit.*, t.2, p.929.
7） 〈 〉内はプチによる補筆部分。
8） se は草稿にはない。プチによる誤読だが，se がないと意味が通じない。
9） プチは〈un mot illisibie〉としているが，fait と読める。
10） *Œuvres romanesques et théâtrales*, *op. cit.*, t.2, p.930.
11） *Ibid.*, p.929, n.2.
12） *Ibid.*, p.4.
13） *Ibid.*, pp.972 973.
14） *Ibid.*, p.958.
15） *Ibid.*, p.973.
16） *Ibid.*, p.960.
17） 曖昧というよりも，まったく書かれていないのに近い。したがって読者は，なぜアゼベドがアンヌを見捨てるのか，理解できない。
18） *Œuvres romanesques et théâtrales complètes*, *op. cit.*, t.2, p.969, n.1.
19） *Ibid.*, p.971.

20) プチは〈un mot illisibie〉としているが，puissamment と読める。
21) *Œuvres romanesques et théâtrales complètes, op. cit.*, t.2, p.973.
22) *Ibid.*, p.33.
23) *Ibid.*, p.44.
24) *Ibid.*, p.942.
25) *Ibid.*, p.947.
26) *Ibid.*, p.936,n.2.
27) *Ibid.*, p.4.